

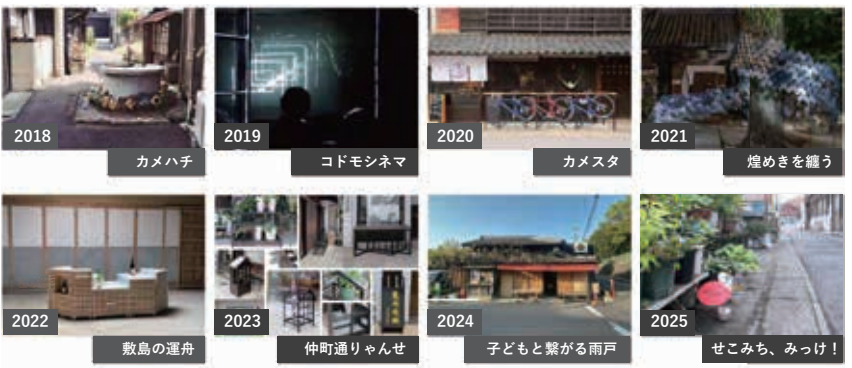
亀崎プロジェクト - せこみち、みつけ！ -



亀崎プロジェクトについて

愛知県半田市亀崎町は海運と酒蔵のまちとして栄え、ユネスコ無形文化遺産となった「潮干祭」や「せこみち」と呼ばれる路地裏から生まれる風景が魅力的なまちである。

私たちの研究室では、亀崎町をフィールドとしたまちおこしプロジェクトを行っており、学部3年生が1年間をかけてまちの読み解きから提案・交渉・施工まで全ての工程を自分たちで行っている。まち歩きやリサーチ、住人の方々との交流の中で、自分たちがまちに対して何ができるのか模索しながら進めていった。



軒先から延長される生活空間

亀崎町にひろがる「せこみち」

せこみちとは、この地域の方言で「細い路地空間」のこと。人がすれ違えるかどうかというほどの狭路を、このまちの人々は亀崎のアイデンティティとして認識している。



かつて酒造・海運で栄えた亀崎では、人々の流入により住居を密集させ、住居間に細い路地「せこみち」を張り巡らせた。このエリアの人々は強いコミュニティを持っており、互いに贈り物やおすそ分けを送りあう文化が残っている。

また密集地であることから、住民が育てる植物などが道沿いいっぱい並んでおり、独自の風景を生みだしている。

「道」に目を向けたリサーチ

かつて住民同士の話し声が各地で聞こえ、子どもたちが路地を遊び場としていたせこみち周辺では、近年少子高齢化が進み路地は静まり返っている。しかし、植物などの貰い物を軒先に飾る「ものを介したコミュニケーション」の文化は今でも残されている。

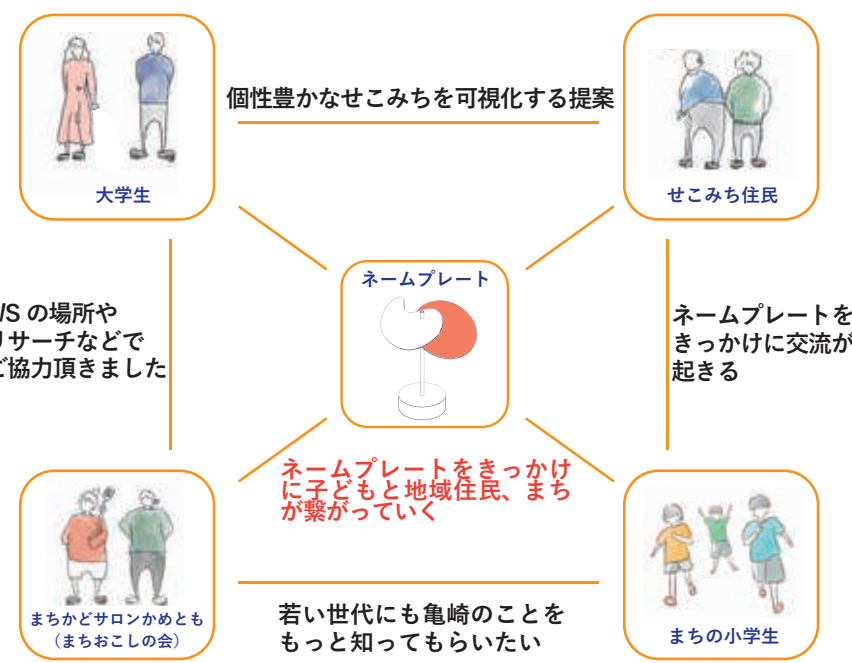
また亀崎町の「道」に目を向けると「アスレ坂」「岡田はんの坂」など、まちの人々や子どもたちが愛称を付けた坂が各地でみられており、愛称というささやかなコミュニケーションが町には浸透していると感じた。



軒先がさまざまなモノたちによって彩られる風景をこの場所の魅力として私たちが感じた一方で、この場所に住む人々は、せこみちの風景に価値を感じておらず「何もないところだよ」という声が多かった。

かつての愛着が湧く風景を取り戻し、個性豊かなせこみちの姿へと人々の認識が変わっていくような取り組みが出来ないだろうか、と考えていった。

愛着の湧く風景を目指して



亀崎町には、場所への愛着を深めるために道に名前を付ける文化が残っている。手法としてこの文化を継承し、子どもたちがせこみちの植物へ名づけ、看板をつくるワークショップを企画する。

ふと気になった場所に名前をつけていくことが、自分ごととしてせこみちを体験することに繋がり、その柔軟な発想力がせこみち住民にとって新鮮さのある、両者にとって愛着の湧く空間と発展していく。

路地裏へと介入するプロセス

せこみち全体へのフィールドリサーチ

亀崎町に存在するせこみちを網羅的にリサーチし、その中で

1. 道沿いに植物などが並んでいる
2. 子どもたちや町の人が目にしやすい
3. 住民の方が日常的に通るような道であること

の3つの条件に合う敷地に提案をすることで、せこみちが愛着の湧く風景となっていくと考えた。

現在のせこみちは「潮干祭」など町のイベント時以外では子どもたちや町の人が通ることが少ないことから、イベント時に人々が通るエリアを重点的にリサーチしていった。



子どもたちが主役となるワークショップ

主体性をもって製作する時間



子どもたちが興味を持って WS へ参加してくれるように、できる限り参加してくれた子どもが主役となるような形式とした。

子どもたちが発見したそれぞれの名前がもつ色、周辺環境と色のなじませ方、子どもたちへの自由度などから、最終の色の組み合わせ決定は子供たちが選び取って作ることができるように色の組み合わせの候補を私たちが準備し、最後に一緒に組み上げる形式とした。

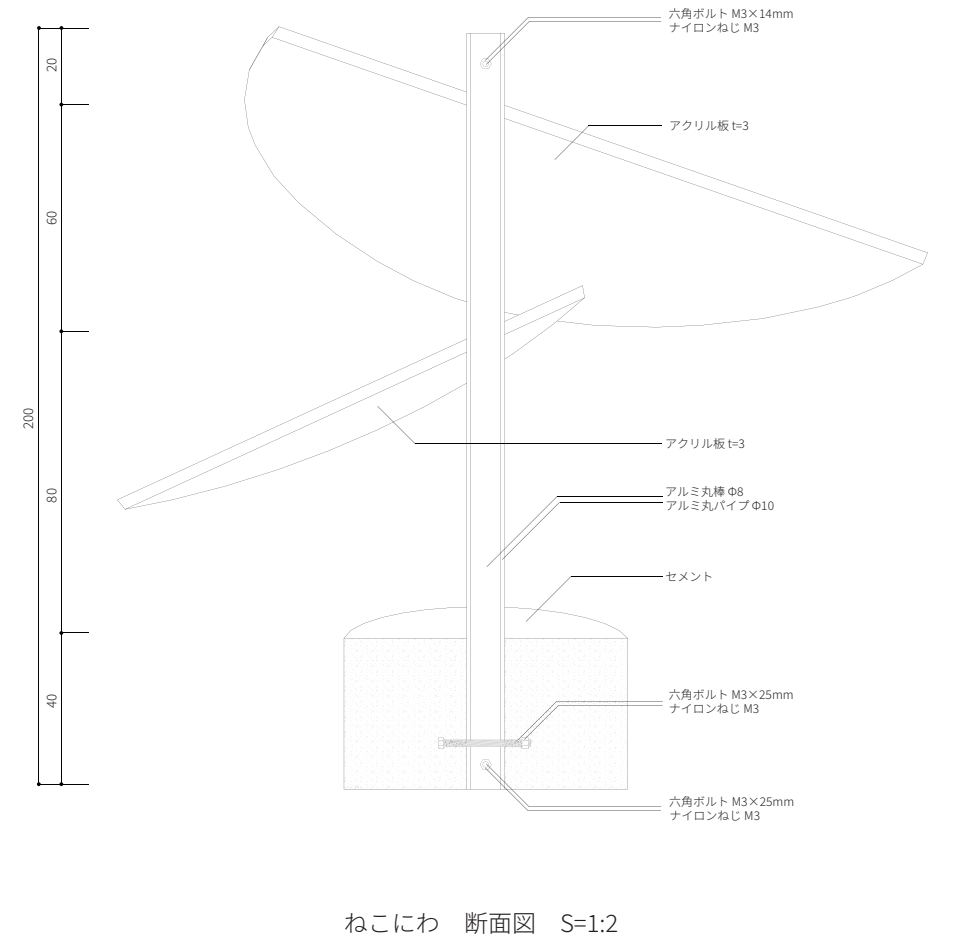
エリアをしばってリサーチを進める

敷地の候補をいくつか選定し、候補となる場の住民に提案させていただけないか交渉を行った。生活道路に学生がアプローチするハードルは高く、頑固なコミュニティに介入するために時間をかけて交渉し、8軒の方々から了承して頂いた。



残り続ける強度をもったカタチ

提案物が残り続けるよう、支えとなる土台が悪目立ちせず、支柱長さはそれぞれの提案場所に適した高さとなるように詳細な調査を行ったため、16基のネームプレートそれぞれが周囲のものに馴染んだ寸法となっている。また、風雨にさらされても倒れず、錆びないように素材や土台寸法の調整を行った。



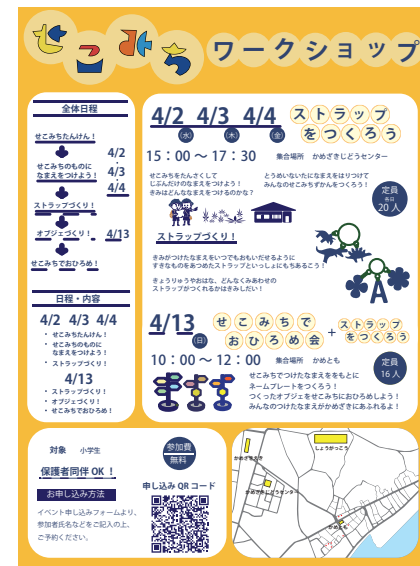
ねこにわ 断面図 S=1:2

その後の出来事

ネームプレートを置いた後、散歩中に文字や植物を見ている人が何人か見ることができ、遠方からやってきた息子家族が興味をもって散歩中に探してくれていた。また設置させていただいた住民の方々自身も、せこみちに散らばっているネームプレートを散歩中に見るのが楽しみになったと仰っていた。



52 人の名付け親たち



告知のために左記のようなフライヤーを制作し、現地の小学校に許可を頂き配布した。

事前予約者は 15 名程であったが、三日間開催したワークショップでは日に日に人数が増加し、最終的に 52 名の名付け親が生まれた。

1～3 日目の WS では、せこみちを探索し、軒先に存在する「表出物」に対して何かに見立てたり、観察しながら軒先空間とせこみちのつながりを見出した。4 日目には名付けた表出物を彩るネームプレートを製作・設置する。

DAY1~3 -4/2~4

14 : 00	14 : 20	14 : 30	15 : 00	15 : 15	16 : 00
集合・グループ分け・WS 説明					
			せこみち探検		
			名前採取の発表会		
			記念品製作		

DAY4 -4/13

9 : 45	10 : 00	10 : 45	11 : 30	11 : 40	12 : 15
かめともに集合		ネームプレートの組立			
名前発表クイズ・WS 説明		記念品製作			
		記念撮影			
		ネームプレートの設置			



せこみち探検隊

普段は通り過ぎてしまう狭い路地を探検しながら亀崎町での暮らし方を探索した。子どもたちはふと気になったモノたちに個性豊かな名前を付けていき、「〇〇に見えるかも！」という声が聞こえた。



土地に命を再び吹込む

名前に合った色の組み合わせを照らし合わせながら決定し、名付けられた場所に設置していった。子どもたちによって路地裏に命が吹き込まれていく。



小さなモノが場の空気を変えていく

せこみちに点在する 18 基のネームプレートは、通り道としての路地裏の空気を変え、立ち止まって植物たちに目をやるきっかけとなる。



名前採取の発表会

みんなのつけた名前をその背景とともに共有した。「たしかに、みえる！」といった共感の声や、「どこにあるの」と町に興味をもつきっかけとなった。

せこみちと子どもたちが繋がる

かつて閑散としていたせこみちの空間で、今日住民の方と子供たちとの間で「～の意味で～ってなまえで…」とせこみちにつけられた名前を元に会話が生まれていた。

